

「子どもたちはみんな漢字が大好きで、ねだられるほど」

梅島幼稚園(足立区)

佐々木美紀先生

「みんな、今日はどこに来たのかな？」

入園したての三歳児は、本当に小さくて、床に座った子どもたちに視線を合わせるため、こちらもしゃがみながら、こう尋ねます。

「梅島幼稚園！」

子どもたちの元気な答えが返ってきます。

「そう、梅島幼稚園だよ」

そう言って、「梅島幼稚園」と漢字で書いたカードを見せると、先生が持っているのは何だろうと、子どもたちの視線が自然に漢字に集まってきます。そこで今度は、

「今、お話ししている先生は、佐々木先生っていうんだよ」

と言いながら、「佐々木先生」と書いた漢字カードを見せる……、子どもたちの漢字との出会いは、こんなふうにはじまります。

そして、まずは「椅子」や「机」など身のまわりの物を漢字カードで見せたり、絵本に出てくる言葉を漢字で黒板に書さながら読み聞かせをしたりと、常に話す言葉を漢字で見せることで、少しずつ漢字に馴染んでいきます。

だから、四歳児、五歳児になると、もう先生が漢字を使ってお話を

するのが当たり前という感じで、先生のほうを見ながら、すごく集中して話を聞いています。「今度はどんな漢字が出てくるんだろう」という興味がすごくあるみたいで、新しい漢字カードを見せると、みんな、「待ってました」というように目を輝かせます。



漢字絵本を読む園児たち

教材としては、月一冊のペースで漢字の絵本を読むほか、俳句や諺、それに「朗誦撰」といって、詩や古典、漢文などを集めたものの中から、学年ごとに振り分けられた課題をんだりそのあとは漢字を

使ったさまざまなゲームで遊んだりしています。

小さいうちは、どうしても口がよく回らないので、あまり長い文は読めませんが、年少さんでも、三学期になると“諺かるた”に取り組みます。一応、一日五枚くらいずつを目安にしていますが、子どもたちの気持ちに乗っていて「もっと、もっと」というときは、七枚、十枚と枚数を増やします。先生が「頭隠して」と言ったら子どもたちが「尻隠さず」と続けるというように、掛け合いでやるとリズムもよく、子どもたちもすごく

楽しいみたいです。

そして、これが年中さんになると、島崎藤村の『初恋』、年長さんでは福沢諭吉の『学問のすゝめ』など、かなり長いものまで読めるようになっていきます。

子どもたちは、本当に漢字が大好きで「まだちょっと難しいかな」と思っているようなものでも、どんどん吸収してしまうので、こちらのほうが教材の準備に大忙し、ということも珍しくありません。

また、特別に漢字カードを用意せずに、その日の出来事を黒板に漢字を使って書きながら話したりするときでも、「今日はお空から雨が降ってきました」と言いながら「雨」という字を書こうとすると、書いている途中で「あ、雨でしょ！」という声が年少さんからも上がったりして、私自身、びっくりさせられたりします。

お母さん方からも、一緒に電車に乗っていて漢字しか書いていないのに、お子さんが「次は目白だよ」と言ったりして感心した、というような話はよく聞きます。

他の幼稚園に勤めている友達と話していると、「大きな声で呼び掛けても、子どもたちがなかなかきちんと聞いてくれない」「歌を一曲マスターするのに何週間もかかってしまう」といった話をよく聞きますが、うちの幼稚園では、先生が前に立つと、声を張り上げなくても子どもたちはすごく集中してくれますし、年長さんくらいになると、集中を持続できる時間も、大人がびっくりするくらい長いのです。うちの園児たち

なら、漢字や工作など、いろいろなことをやりながら、一、二時間はきちんと椅子に座っていられます。歌も、漢字で歌詞を黒板に書くと言葉の意味も区切りもわかりやすいみたいで、ごく短時間で歌えるようになってしまいます。そういうところで、漢字によって培われた集中力や理解力は本当に素晴らしいと実感しています。